

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間

会報 No.48

二〇〇九年二月一日発行

川崎市幸区古市場 2-109  
京浜協同劇団内  
TEL 044-511-4951  
郵便振替 00250-3-18369

## 劇団50周年記念行事に全面協力

### ——第二回定期総会で講演と新年度方針

山木 健介

第二回定期総会を前回総会以来二年四か月ぶり

に、一月一八日に開催しました。今回のゲスト篠原

久美子さんは、一九六〇年生まれの劇作家で日本劇

作家協会理事をされています。また、二〇〇六年に

は若手の劇作家たちと「劇団劇作家」を立ち上げて

います。

総会の講演に先立って、文化の仲間以下にメツ

セージを寄せられました。

\*

講演タイトル「演劇は平和が好き!…なんだろう

か?」

メツセージ…最近の政府の福祉・文化予算の削減

は目に余るものがあります。「演劇ができるのは平

和だからこそ」という言葉はよく耳にしますが、日

本が演劇に最も国家予算を割いたのは第二次世界大

戦中でした。演劇は本当に平和が好きなんでしょう

か?

普通の市民が兵士として人を殺せるようになり、

平和と演劇を愛する人たちが戦争に領いていくシス

テムについて、考えたいと思います。



代表世話人・二村さん



講師の篠原久美子さん

総会での講演は、約一時間話していただき、そのあと約二〇分質問に丁寧に答えていただきました。「人のために使う金と遊ぶために使う金はケチるな。と、祖母がよく言っていた。祖母は人が財産ということを知っていた。それは福祉と文化だろう。」演劇が社会のためにできることは小さい。やっただって無駄なのは知っている。でも、あきらめない。「弱者の痛みを拾って書きつづける。」「夫以外ではガンジーが好き。ガンジーの弱いところが好き。弱いけれど、人のために何かしようとしたときにすごい力が出てくる。」

演劇について、平和について、身近な語り口でお

\*



篠原さんの講演に聞き入る参加者

話をしていただきました。篠原さんの講演はテープにとつてありますので、お聞きになりたい方は世話人までご連絡ください。

篠原さんのお話の余韻を残して開催した定期総会は、総会後に予定されている篠原さんも参加する交流会を急いだのか(？)特に意見もなく、劇団創立五〇周年記念企画(三月の文化祭、秋以降の記念レセプション・記念誌発行・CD発行・記念公演)への参加・全面協力をはじめとした議案が、提案どお

り採択されました。選出された役員は以下のとおりです。

代表世話人 二村柊子、斎藤博章、高橋明義、藤

崎秀子

事務局 山木健介、須田セツ子、西川日女子

世話人 代表世話人・事務局以外では、

小野寺晃、佐藤友吉、角田博志、渡

辺そのこ

渡辺さん以外は留任ですが、渡辺さんの加入で平均年齢が下がり、若返った印象です。また、男六人・女五人で男女のバランスも以前より良くなりました



総会での議案の提案

た。

総会後に、文化の仲間・劇団員・ゲストの篠原久美子さん含めて二九名で交流会を行いました。西海亭の須田和美さんの料理と劇団の細田寿郎さんの鰯料理を堪能しながら、楽しく交流しました。特に、劇団の若手の人たちが篠原さんの周りに集まって、篠原さんから吸収できるものは吸収しようとしていたのが印象に残りました。



劇団の藤井さんのご挨拶をいただきました



新しく世話人になった渡辺さん

# 宗兵衛さんは電気羊の夢を見るのか？

石山海

弱者切捨て型規制緩和からセイフティネットの拡充へ。

日経新聞の社説までそう訴えるほどこの数ヶ月で世の中の流れは変わった。「川崎の海を拓いた」池上幸豊とその妻」は、まさにその転換期に上演されることになった。

ことの発端はリーマン・ショックに始まる世界的金融危機。パックスアメリカーナとまで謳われたアメリカ主導の市場原理主義経済がついに破綻した。



「池上幸豊とその妻」の舞台① (以下の写真①～⑤撮影：小池 汪)

サブプライム・ローンに代表される宗兵衛さんのような高利貸しが幅を利かすソウベイズムは行き詰まり、弱者救済こそが経済の底上げに繋がるというユキトユイズムが見直されるようになったのは、正に今回の芝居の流れとマッチしているではないか。

ところで、世界が金融危機に直面している時を同じくして私自身はまったく別の危機に直面することとなった。

左足中指切断の危機である。

世界経済危機とはまったく関係のない役者稼業の慢性的経済危機の私は東京から稽古場の川崎まで自転車通っていた。

片道一時間半に及ぶその帰路で私は転倒し左足中指を深く裂傷、本番三週間前であるにも関わらず入院することとなった。

突然の主役の大事故に関係者一同啞然呆然。作者の小川信夫先生も慌てて入院先まで飛んで来られた。

「私はもうチケットを三〇〇枚売ってしまった。全てあなたにかかっているから頑張つて直して下さいよ！」

と、励ましともプレッシャーとも取れる言葉をかけて下さった。

その時、往診の先生が廻つて来たので小川先生が怪我の様子を尋ねると、その医師はこともあろうにこう聞き返した。

「代役はもう決まりましたか？」

私はその言葉に目の前が真っ暗になった。これは役者にとっては死刑の宣告にも等しい言葉だ。

小川先生は必死に「彼は主役で替えがないんです！ 皆が彼に期待してるんですよ！」と、説得してくれたがその医師は、



舞台②

「正直、厳しいと思います」

幸豊「…成島先生が言われていた。これからの学問は光だ。世の中を照らし出す光にならなければ駄目だ。人間の暮らしを豊かにする誠心満ちた実学。それは、経世済民の道を究める学問だと言っておられた…そうか、こういうことだったのか」

成島先生とは幸豊の師であり、儒学者で八代将軍吉宗の幕閣でもあった成島道筑のことである。

「経済」の語源である「経世済民」とは文字通り「世を経め、民を救う」義のことである。その「経済」はいつから、己が利のために他人にリスクを押し付け合うためのものと墮してしまっただろうか？

実体経済という救うべき民から金融を引き離し、金が金を生む錬金的イカサマでバーチャルな栄華を築き、ついには自滅した現代の義なき「経済」。今の時代にこそ一役者としてこの台詞を言いたい。

その一念で私は間もなく稽古に復帰した。

今となってはオカルトめいた誇大妄想を言えば、この時期にこの芝居を上演することになったのも、本番直前の私の事故も、そしてその後の奇跡的な早期回復と復帰も、全てこの乱世にユキトユイズムを問わんとする「経済人」池上幸豊の大いなる御心だったのではないかと。

そんな思いに駆られて私は千秋楽までの間に三回、池言坊の幸豊の墓を訪れ花を添えたのだ。南無。

須磨を演じて

## 幸せな記憶が

## 心と身体に残っている

藤田 るみ

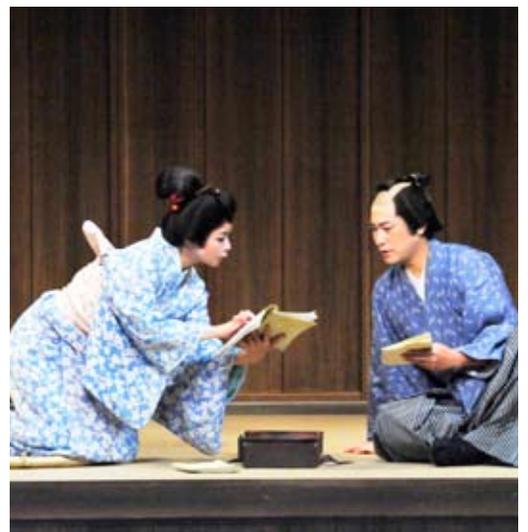
私は川崎生まれの川崎育ちであり、川崎の郷土劇に参加するのは、この地で表現活動をしている私にとつてとても意義のある心躍ることであった。

今回私は池上幸豊の妻、須磨役を頂いたのだが、脚本の解析をはじめると、すぐに驚愕の事実に出くわした。最初のシーンの幸豊と須磨が想像を超えて若かったのである。なんと須磨は一六であった。最後のシーンで三六歳くらいなので、とりあえず、そつちはどうにかなるとしても、しばし呆然である。様々なものに成り代わるのが役者であるから、幾つであろうと与えられた役をこなしていく事に変わりは無いのだが、現実の私はもう四〇歳だ。一〇代や二〇代のあの輝くような美しさはとくに剥がれてしまい、日に日に体が重たく、おまけに脳は軽くなっている。作者の小川さんからは最初の三ヶ月くらい顔を合わせる度に、「須磨は美しく、聡明で品があつて、若々しくて瑞々しくて、ユーモアがあり、自分の夢に向かっていく新しい女性だ。」と言われ続けていた。ますますハードルが上がっていく訳だ。しかもこのプロジェクトには大勢の人の力と想いが掛かっており、この大きな大きな座組の中で私は幸豊と並ぶ重要な役割を担っている。何としてもやはり遂げなくてはならない。

この鈍くなつてしまつていく肢体をひっそりさせてどう勝負をしたらよいのか。すぐに私は若々しく演じるという事を止めた。若いということを意識する時点でもう若くはないということだからだ。時代劇である事も幸いし、娘役の所作を助けにした。美しい動作には品を感じる。早速習っている日本舞踊の師匠に相談し、名主の妻の初々しい頃から晩年にいたるまでの所作の違いにこだわつてみた。稽古が終わると体のあちこちが熱をもち、慢性的に筋肉痛だった。それはふだん怠け者の私にとつてはありがたい事でもある。

外堀は何とかそれで埋めるとして、次に目指すは美しい魂である。瑞々しく品があるとはどういう事か。須磨の向上心、好奇心旺盛なところ、どんな力にも屈しない意志の強さ、弱いものを思いやる、心感受性の豊かなところを深く感じる事に集中した。

そして幸豊への愛情である。幸豊の描く夢に自分の夢を重ねる事によって、単に夫を支えるだけでなく、自分の夢を実現させていくのだから、幸豊と一体になつていくに違いない。一つになりたい。そう思った。いままで、色んな役を演じてきた中で、劇場中の全てのものが一体となり溶け合うという魂が揺さぶられるような瞬間に出くわした事が何回かある。その瞬間を具体的に描きだそうとするには私の語彙はあまりに少ないが、まぎれもなくその空間に生きていくことを実感させてくれる、劇場ごと本当のその世界にタイムスリップするような感覚に近い。私は演じる上で嗅覚や触覚を大切にしているが、今回は池上のあの家から見える景色や、聞こえる音、生活をしている道具の触感をできるだけ多く体感しよう、実際の池上新田や、大師、多摩川、民家園



「池上幸豊とその妻」の舞台③

の名主の家等に身を置いて、その時代に感じたであろう事を体に浸み込ませた。舞台装置や衣裳も大いに私を助けてくれた。

そして、稽古が進んでいくにつれ、私の須磨は他の役者と共にあの場で生き始め、私は須磨としてあの家にいる事が大好きになった。家の中に座り外を眺めると、そこは稽古場の壁であり、劇場の客席であるのだが、私には青く澄んだ多摩川のそそぐ海が見え、庭木が風にそよいでいるのが見え、季節の花の香りを感じることができるようになっていた。

幸豊や他の人々と情を交わし、須磨としての心が豊かになり、私の須磨はできあがった。もちろんまだまだ色々と役者としての課題が私には沢山残っているし、観た人の心にどう映ったかはまた別であるが、終わつた今でも、あの時代に本当に幸豊と共に新田を創り出せたような幸せな記憶が心と身体に残っている。

『池上幸豊とその妻』を観て

# かなり本格的な作品だ

## と思いつながら

萩坂 心一

十一月に川崎郷土・市民劇『池上幸豊とその妻』を観た。三年前に上演された『多摩川に虹をかけた男』を観逃していただけに、今回の「池上幸豊」はとも期待した。

初演当日、エポック中原の一階席はほぼ満席、熱を帯びた雰囲気であった。幕が開いて驚いたのは、どの役者も江戸時代の人物に見えることだ。髷が似合っている。着物姿もしっくりしている。所作や行動



「池上幸豊とその妻」の舞台④

が江戸の人間になっている。稽古の賜物なのだろう。舞台装置もいいものを作っており、これはただの市民劇ではない、かなり本格的な作品だと思いつながら舞台に引き込まれた。

うたい文句にあるとおり「川崎の海を拓いて池上新田を造った江戸時代の偉人」という正統派ドラマであるが、随所にユーモアを交え、ドラマの構成・骨組みがしっかりとっていて、作者・小川信夫氏の筆の確かさに敬服する。対照的な人物を設定し、その誠実な執筆姿勢に心打たれた。こういう才能のあるお方が川崎市民でいらっしやることを誇りに思う。

一点だけ残念だったのは、エピソードの「水鳥祭」のシーンが長くて、それまでのドラマの感動が薄れてしまったことである。特に、比較的重要な人物を演じていた役者が別の人物で登場したりするので、観客としては芝居に対する集中度が低くなってしまった。台本ではわずかに四ページのシーンなのに、あれだけたっぷり描くのは、史実として有名な出来事を再現してみせようという意図があったのかもしれない。そうだとすると、もう少しカットしてもよかつたのではないか。

「それまでのドラマの感動が薄れてしまった」と書いたが、その前のシーンでは涙があふれた。又八の号泣シーンだ。作者も演出も、そしておそらく演じた役者も、ここ一番を狙っていたと思うが、その

狙い通り、私も泣いた。

又八を演じた役者・ミズノタクジ氏は素晴らしい。全体的に演技レベルの高い舞台だったが、とりわけ又八の演技は光っていた。彼の立ち姿、身のこなし、踊り、台詞回し、どれをとっても美しかった。幸豊と須磨という主役二人の演技が安定し、京浜を中心としたベテラン勢が脇を固め、そのおかげで、たとえば又八のような役が際立ったのかもしれない。ラニヨミリ以外でミズノタクジ氏の演技を観たのは初めてだと思うが、抜群の才能・演技センスをもった役者を目の当たりにでき、私にとっては驚きであり、喜びであった。今後はできるならば京浜の舞台でも観てみたいものである。



「池上幸豊とその妻」の舞台⑤

京浜の演劇・戦後編 その序章⑨

# 視界ゼロの霧の中 クロサン密着で葡萄座へ

須田 輪太郎

故黒澤参吉さんから、ボクは言い尽くせないほどの恩義をうけている。五年勤めた国鉄を辞めて、芝居だけで生きていこうと決心したものの、劇団に入るでもなく、俳優修行に精進するでもない怠惰なボクを、クロサンは親身になって面倒をみてくれた。クロサンの親友だった萩坂桃彦さんが「ロマンチストであり、妙にノブル（貴族的）な面もある」と、クロサンを批評したのを憶えている。時に斎藤茂吉の「白桃」を語り、三好十郎の「妻恋行き」や「その人を知らず」が大好きだというクロサンが、突然パニョルの「マリウス」やオニールの「ああ荒野」は見ておくべきだと、ボクを誘導する。

クロサンの厳父、故黒川英雄氏は元々画家で、女学校の講師をなさっていたこともあり、武者小路実篤らの「新しき村」の運動に参画していたとも聞く。

なぜかは忘れたが、中丸子の英雄氏宅に呼ばれてベートーベンの交響曲五番「運命」のレコードを拝聴したことがある。英雄氏もそうだが正座の姿勢を崩せないで、とても辛かったのを憶えている。クロ

サンの「貴族的な一面」は、お父上ゆずりなのかもしれない。

一九四九年七月〜八月に続発する怪事件は、後に松本清張が「日本の黒い霧」と名付けた、極東地域での共産主義勢力拡大に怯えるGHQが、日本警察を率先に使用して、民主的権利の剥奪や労働運動を弾

圧する謀略事件のハシリだったのだ。くく①国鉄三万六千人の整理を発表した翌日、国鉄総裁が常磐線で轢死（下山事件）。②国鉄第二次整理六万二千人発表の翌日、三鷹駅で無人電車暴走、六人死亡（三鷹事件）。③八月十七日、東北本線金谷〜松川間で列車転覆事故、三人死亡（松川事件・国鉄労組員十三名逮捕。死刑三人を含む全員有罪判決は最高裁での係争を含め、無罪確定まで十二年かかる）。

国鉄をめぐる怪事件は、キャンノン機関と呼ばれる米CIAの暗躍があつたとされ、占領下日本のミステリーとして最大級のものだった。僅かに国鉄マンを経験しているボクとしては、後ろめたい気分もあつて、苛立ちと憂鬱の複雑な心情の日々を送っていた。

クロサンの光芸社の出張写真も営業不振で、助手の安食恒男さんも辞めて帰郷してしまい、休業状態だった。たしか八月末のある日、クロサンに誘われて萩坂桃彦さんとの話し合いの場に列席した。

神谷量平さんの戯曲「武蔵野の家」が、読売文学賞を受賞したので、横浜葡萄座での上演が決まったが、一幕もので時間が短いから併演作品をクロサンが選んで演出もやってほしいという話に、クロサンは即座に同意した。

二宮千尋作「断雲」という、八王子の小さな織物工場経営者の家族を描いたテアトロ所載の戯曲で、クロサンが温めていたそれを、岩田文子さんという当時眼を掛けていた娘さんをヒロインに、ボクの舞台監督で上演すると、クロサンは一方的に決めた。

十一月の始め。杉田劇場という屏風ヶ浦に近い海岸の劇場で、二日三日の「断雲」「武蔵野の家」の公演が終わった。打ち上げの会で実質的な主宰者の山本幸栄さんは、次の公演は来年三月・根岸橋の交通会館で一幕もの三本立て、黒澤組は伊藤貞助作「村一番の大げやき」と発表した。黒澤組とは無論クロサンとボクのこと。一寸待ってって叫んでも後の祭り、一事が万事、ボスたちの談合でボクの身柄は横浜葡萄座のスタッフに釘付けされ、五十年の夏の野毛山小劇場での「モルモット」「鬼の面」公演まで葡萄座劇団員となっていた。四九年の暮れに「人形劇団ひとみ座」に入団して、人形劇一年生の修行を始めても、クロサンも、萩さんもソナノ関係ナイといった顔をしていた。（つづく・次回は最終回）

（劇団ひとみ座前代表）

# 京浜協同劇団創立50周年

## を祝う・文化祭

京浜協同劇団 内田 勉

京浜協同劇団は二〇〇八年一二月で創立五〇周年を迎えることになりました。五〇周年を記念して、

記念誌の刊行、劇中音楽のCDの制作、祝賀会、記念公演等の企画を予定し準備しております。その第一弾として、これまで劇団と親しく交流して頂いている皆さん、稽古場を活用して頂いている皆さん方と一緒に劇団の稽古場にて「文化祭」を開くことにしました。地域の皆さん、子供さんたちにも楽しんで頂ける内容です。日程と出演して下さる皆さんは左記のとおりです。入場料は無料ですが、素晴らしい舞台にはおひねりとか大歓迎です。(敬称略。演目等は変更される場合があります。)

・3月7日(土) 午後2時〜4時

■坂井・山北創作舞踊研究所モダン・ダンス川崎ジュニアクラス「JRock MusicでDance Party!」 ■Flamenco(北原やよい他)ギター・唄・踊り ■京浜協同劇団有志「南

京玉すだれ」 ■腹話術の会「きずな」 ■サークルねぎぼうず&ハンドベルアンサンブルLINK(イングリツシユハンドベルの演奏)「ビリーブ」「メモリー」「気球に乗ってどこまでも」「YOSAKU」他 ■おもしろマジック(京浜協同劇団 吉武寿美子)

・3月7日(土) 午後7時〜9時

■国鉄横浜うたう会(合唱) ■コカリナ演奏 江さし純 ■びあのふりーすくーる川崎教室(細田トキ子、鬼丸ゆり、白井由美子、根倉藤子)「百万本のぼら」他 ■6年生バンド(塩田儀夫他)「風に吹かれて」「みんなと一緒に」他 ■落語・寝床家道楽(中島邦雄)

・3月8日(日) 午後2時〜4時

■松平晃 トランペット演奏「ハトと少年」「荒木栄三つのうた」「春のうたメドレー」「東京ブギウギ」 ■川崎保育のうたごえサークル紫陽花「信じる」「スマイルアゲイン」「犬が自分のしっぽを見て歌う歌」 手話付きの歌「あなたの夢は」「おくりもの」 大型絵巻「夢わかば」 ■京浜協同劇団「権兵衛太鼓」 ■落語芝居(吉武寿美子) ■狂言芝居「お告げの妻」(京浜協同劇団 稲垣美恵子、護柔 一)

\*



京浜協同劇団創立50周年記念企画

# 京浜協同劇団創立50周年を祝う・文化祭

3月7日(土)

午後2時開演 ①坂井・山北創作舞踊研究所 モダン・ダンス川崎ジュニアクラス／②フラメンコ(北原やよい ほか)／③京浜協同劇団／④腹話術の会「きずな」／⑤サークルねぎぼうず&ハンドベルアンサンブルLINK／⑥おもしろマジック(吉武寿美子)

午後7時開演 ①国鉄横浜うたう会／②コカリナ演奏(江さし純)／③安達元彦びあの・ふりーすくーる／④6年生バンド(塩田儀夫 ほか)／⑤落語 寝床家道楽(中島邦雄)

3月8日(日)

午後2時開演 ①トランペット演奏(松平晃)／②川崎保育のうたごえサークル・紫陽花／③日本の太鼓(京浜協同劇団)／④落語芝居(吉武寿美子)／⑤狂言芝居(稲垣美恵子・護柔一)

会場 スペース京浜(京浜協同劇団稽古場) 入場無料

お気軽にスペース京浜一稽古場に足をお運びください。お待ちしております。

劇団ホームページ：<http://www.kinet.or.jp/keihin/> Eメール：[keihinkyoudougekidan@nifty.com](mailto:keihinkyoudougekidan@nifty.com)

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市民劇場 第288回例会

劇団NLT公演 喜劇 嫁も姑も皆幽霊

作・演出 池田政之／出演 田村亮・音無美紀子・鳳八千代・川端慎二・平松慎吾・木村有里 ほか

日程 1月29日〜2月7日

会場 宮前・幸・多摩・エポック中原の各市民館

笑って、泣いて、感動して……。爆笑の人情喜劇

問合せ 川崎事務所 ○四四一四四一七四八一

溝の口事務所 ○四四一八五五・五九一六

◆東京演劇アンサンブル公演 プレヒトのアンティゴネ

ソボクレス原作ヘルタートリン訳による舞台用改作

演出 志賀澤子／音楽 林光／出演 原口久美子・神成美忍・公家義徳・松本暁太郎 ほか

日程 プレヒトの芝居小屋2月12日〜14日 ほか

会場 プレヒトの芝居小屋・俳優座劇場

入場料 (前売) 一般四五〇〇円 学生三五〇〇円

(当日) 五〇〇〇円

問合せ 電話〇三・三九二〇一五二三二

◆劇団銅鑼公演 No.38 ハンナのかばん

脚本 いずみ凛／演出 モニ・ヨセフ／出演 谷田

川さほ・佐藤文雄・郡司智子・栗木純・館野元彦・馬淵真希 ほか

日程 銅鑼アトリエ公演2月18日〜2月20日 ほか

会場 銅鑼アトリエ・東京芸術劇場・牛込筆筒地域

センター・三鷹市芸術文化センター ほか

入場料 (日時指定・全席自由席)

一般三五〇〇円 中高生一五〇〇円

小学生一〇〇〇円

問合せ 劇団銅鑼 ○三・三九三七・一一〇一

◆川崎市民劇場 第289回例会

オペラシアターこんにやく座公演

オペラ「フィガロの結婚」

作 ロレンツォ・ダ・ポンテ／作曲 モーツァルト

日程 4月2日〜7日

会場 宮前・幸・多摩・エポック中原の各市民館

エキゾチックな恋のドタバタ。生演奏でつづる日本語オペラ。

◆和太鼓ユニット「無限」ライブ in 川崎

ENERGY & 技・心が織り成す無限の世界

日程 4月5日(日) ①午後三時 ②午後六時 開演

会場 川崎アトリエセンター (新百合ヶ丘)

入場料 一般三〇〇〇円 学生・障害者二〇〇〇円

(全席指定)

プロフィール 無限は、花原京正・花原秀正・古里祐一郎により〇五年結成。平均年齢二二歳。

和太鼓のイメージを変え、新しいカタチを創ろうと活動中。〇八年は一月から毎月マンスリーライブ「explosion」を開催。

問合せ 吉田 ○八〇・一〇三八・九〇八九

(古里君は私の所属する「川崎太鼓仲間響」のメンバーで、

プロ活動を始めた若者です。躍動的な舞台をぜひご覧ください。文化の仲間世話人・高橋

◆山寺圭子「うた・唄・歌」 春に……

日程 4月10日(金) 午後七時開演

会場 めぐるパーシモンホール・小ホール

入場料 全席自由三五〇〇円(高校生以下二〇〇〇円)

ソプラノ 山寺圭子 ピアノ 佐藤恵

演出 花、芭蕉布、さとうきび畑、島唄 ほか

問合せ 山寺 ○四四・五一・八九九五

◆第3回「弾談の会びありの公演 宙・ひと・音

日程 6月13日(土) 午後二時開演

会場 杉並公会堂・小ホール

会費 会員二五〇〇円 一般三〇〇〇円

当日三五〇〇円

第一部 ピアノ・鈴木たか子 組曲「展覧会の絵」

第二部 講演・唐牛宏(天文学者)

ピアノ・鈴木たか子 星たちの息子 ほか

問合せ 市原 ○四二二・五五・四七六七

鈴木 ○三・三三三三・〇六九七

■文化の仲間ギャラリー■

竹間テル子 ④

